

－発言すべき時に発言できる受講生の育成を目指した授業活動の報告－

A report on an approach in generating active participants in public speaking activities

大橋 弘顕

キーワード：英会話 コミュニケーション流儀 対話力 コンテキスト

Keywords: Speaking class, Communication strategies, Context

Abstract

This report attempts to indicate strategies and their consequences that took place in 1S class, a mandatory English speaking class for freshmen, of engineering department at Yokohama National University. As for its objective, the unified syllabus states as such: To enhance communication skills which enable students to conduct discussions following speech deliberations. Active engagements and participations of students are a must-have in accomplishing the objective; however, those are the biggest obstacles at the classes in this particular department. They hardly speak up in class. This report then, tries to showcase strategies and activities conducted in three of 1S class in an approach to enhance active participations, and evaluate its consequences.

1. はじめに

本稿では、横浜国立大学の理工学部対象の1Sクラスの授業活動報告を行う。1Sとは、一学年生必修の英語スピーキングクラスの事であり、到達目標として「受講生の口頭の発表力、そして発表に関連した討論が可能なコミュニケーション力を高める」旨が共通シラバスに記載されている。上記到達目標の達成には受講生の授業活動に対する積極的な参加が前提になるが、筆者の体験では、そもそも大学の英語の必修授業において受講生が自発的に手を挙げて発言すること自体まれである。複雑化する国際社会において自分の意志を明確に伝えることは大事なコミュニケーションマナーと考えられるが、それこそ受講生が苦手とするところである。該当コースにおいては、発言すべき時

に積極的に発言できる受講生の育成を目指した。多岐にわたる対話の活動内容を分かり易く伝えるために、心（心構え）、技（技術）そして体（体力）に分類して発表すると共に、その結果を考察するものである。

1. 背景

2-1. 受講生の現状

TOEFL のペーパーベーステストを基準にする時、受講生の英語力は決して悲観的なものではない。筆者が2008年以来担当した理工学部的一年生9クラス(300名弱) では過去に及第点に達しなかった者(成績評価を100点満点としたときの60点以下) はまだいない。しかしながら、2012年に行った同クラスの受講生アンケート調査では、82%の受講生(116人中97名) が英会話には苦手意識があると答えている。テスト形式での読解力、及びリスニングにおいては一定の力を発揮できるが、こと「会話」となると、思うように行かない受講生の姿が読み取れる。そもそも日本語においてさえも人前で話す、またはよく知らない人とのコミュニケーションに慣れていない様が見受けられる。「まじめで勤勉だが、内弁慶」。理工学部の受講生に関して言えば、外国人が日本人に対して抱くそんな古典的なステレオタイプが該当するように筆者は感じている。

2-2 過去の試み

対話をキーワードにした授業を2008年度以来行っている。「言語使用の理念の違い」(斉藤、2003)が受講生の英会話に対する苦手意識の大きな一因だと考えているからである。英会話をコミュニケーションの手段として鑑みたとき、母国とのコミュニケーション作法との違いは大きい。大阪大学コミュニケーションデザイン教授、平田オリザ氏は、「コミュニケーション流儀の違い」(平田、2012)という言葉でそれを表現している。それは文法通り正しく話していれば、相手に本意が伝わるというものでもないことを示唆している。例えば日本人の「謙虚さ」や、「遠慮」といった姿勢が他国では、「消極的な姿勢」と受け取られる場合も考えられる。日本語はコミュニケーションの基盤である文脈に依存する度合いの高いハイコンテキスト言語(Hall, 1976)であるから、「阿吽の呼吸」や「空気を読む」ような、言葉を使わずに相手の言いたいことを察するコミュニケーションが成り立つ。しかしこれは、ローコンテキスト文化圏であるアメリカやドイツ、北欧など、言葉で表現しながら意思疎通を行うコミュニケーション流儀とは相反する。「会話とはお互いの事情を良く知った者同士の気軽で気楽なお喋り。対話とは、お互いのことをよく知らない者同士が『知

らない』ということ为前提として行う意識的なコミュニケーション」(平田、2001, p.150)と定義する時、「コミュニケーション流儀の違い」を乗り越えるための手段が、「対話力」である。対話相手と意思の疎通をはかるために、粘り強いコミュニケーション術を駆使しながら、相手に伝わるように話す技術といってもよい。こちら側がローコンテキスト文化のコンテキストに歩み寄る試みである。授業では3分即興対話(スモールトーク)、そしてスピーチ活動を通し、対話力を育む授業活動を行ってきた。結果としてクラス最終日に行ったアンケートにおいて、英会話が苦手であると答えた受講生の70%の意識に改善が見られた。

3. 新たな試み

3-1. 手があがらない発表会

対話力を向上させる試みにより、受講生の英会話に対する苦手意識を少なからず払拭することができたが、共通シラバスの到達目標の達成といった側面においては不完全燃焼であった事は否めない。

「発表に関連した討論が可能なコミュニケーション力を高める」という到達目標のためにはそもそも、発表者に対してリスナー側の受講生が、フィードバックや質問、そしてコメントをする等何らかの反応を示さなければならない。しかしながら、いざ期末試験を迎えると、発表者のスピーチに対し手を挙げて発言をする受講生が極端に少なかったのだ。授業活動の少人数の中(4名程度)であれば、上記一連の「発言活動」は成されていた。しかし本番の空気の中でクラス全員を前に手を挙げて発言する行為は、日本人受講生にとって依然として敷居の高い行為であることが伺えた。

3-2. 授業の方向性の再構築

日本人が国際社会で存在感を増すには、どのようなコミュニケーション流儀が求められるのであろうか? 複雑化する国際社会において、日本式のコミュニケーション流儀を相手が理解してくれるのを手をこまねいて待っているような姿勢で良いのだろうか? ローコンテキスト文化出身者にも理解されやすい流儀でコミュニケーション活動に参加する技術を体得することは不可欠であろう。

しかし一方では、異文化の流儀を押し付けるだけの教育であってはいけない。それは、箸をとりあげ、ナイフとフォークの使用を強制する行為に例えられるであろうか? いつまでたってもぎこちなさのぬぐえない、えせネイティブスピーカーのような日本人を育成することになってはならない。そのためにはまず、日本人自身が己のコミュニケーション流儀を否定することなく尊重できることが大事である。倉本は、日本人の国際社会でのコミュニケーション流儀として、「プル型」(倉本、2012)のコミュニケーションスタイルを提唱している。「『プル型』とは、相手を尊重して、辛抱強

く話を聞き、相手が何をしたいのかを理解する。その上で、相手の要望もできるだけ汲んで、全体の解決策を考える」（倉本, 2012, p. 217）。このような我々の強みを活かすことこそが、国際社会で存在感を高めることにつながると考えられる。1Sの授業では受講生の謙虚さ、やさしさ、素朴さなどを強みとして受け止め、発言すべき時には対話相手に伝わる流儀で発言できる受講生の育成を目指した。そのための第一ステップとして、受講生に発言を促すことを試みた。

4. 先行研究

4-1 名著講義

受講生が日本人固有のコミュニケーション流儀を尊重するために、その成り立ちを認識することが必要だと考えた。お茶の水女子大学名誉教授、藤原正彦氏などの著書からは、日本人のコミュニケーションにおけるルーツを教わった。例えば、その昔日本では、「寄り合い」で決め事をする時には、子供から大人まで全員が集まり三日三晩語り合ったという。誰もが階級などを意識せず、郷土も百姓も平等な立場で言いたいことを云う。理屈ばかりでなく論題と関係のありそうな経験談なども語られたそうだ。藤原は、日本人のコミュニケーション流儀を、「しこり」という言葉で表現している。「多くが山に囲まれた日本の村には、隣村まで山道を何里という隔離されたような場所も多かった。皆が先祖代々一緒に住んでいる仲間であり、これからも農作業など協力し合って暮らしていかなければなりませんから、しこりが残ると大変です」（藤原, 2009, p. 201）。日本人が物事を時に婉曲的に表現するのは、人間関係が連続する環境（安藤, 1986）において、互いにしこりを残さないように生活するための知恵であると言える。藤原の指摘は、日本独特のコミュニケーション流儀はそれ自体意味のあるもので、長い限月をかけて構築されてきた知恵であることを示唆している。

4-2. 「企業人が求める英語力調査」

受講生に求められる対話力の項目を構築するために参考にしたのは、日本人ビジネスパーソンの現状の英語力であった。高千穂大学一寺内教授らの研究は、「日本人が国際競争、国際協力で十分に活躍するに足る英語コミュニケーション能力は具体的にどの程度必要であり、どの程度不足しており、それを補うにはどうすればよいのかを実際に苦労しているビジネスパーソンから示唆を得ること」を目的に7,354名にアンケート調査を基にしたものである。寺内は、日本人のビジネスパーソンの職業上の英語コミュニケーション能力は読む力はなんとかなるが、書く、話す力はさらに低い

人が多いことを指摘している。外国人との職務上のコミュニケーションの問題点としてあげられている点を幾つか以下に記載する。

1. 日常会話での問題はあまりないが、一旦議論になると、相手の言う事に反論しかつ自分の論を進めることができない。
2. 相手の言う事について聞き役になっていて、自分の意見を言う前に話の筋道が相手のペースになってしまう。
3. 議論中に話す内容の広さと深さが乏しいために、相手の信頼を得ることができたか不安を覚える。
4. 議論中に自分が言いたいことをすぐ言えないうちに、別の外国人に同じ意見を言われてしまって、タイミングを逃して、不利な立場に立たされる。

上記の要因を鑑みた時、「欧米型の議論の流儀」に戸惑っているビジネスパーソンの姿が浮かびあがる。寺内教授は上記の要因として、学校教育でコミュニケーションの技能を修練していない日本の教育政策の貧困さ、また、日本人の性格的弱さをその原因としてあげている。

4-3. 企業が求める英語力調査

企業が学生に求める英語力に関して、立教大学一経営学部が100社からのアンケート調査回答をまとめた調査報告書がある。英語を使う企業における特に評価の高い体験、上位3項目を以下に抜粋した。

1. 英語でコミュニケーションをとり人間関係を構築する (67.5%)
2. 留学経験 (56.6%)
3. 研究成果を国内企業にプレゼンする (53%)

就職時に英語力を計る指標としてはよく、TOEICが上げられるが、対話相手から信頼を得る上で、英語で人間関係を構築した経験は、資格試験の点数や、文法的に正しく話すことよりもっと意義があると言える。日本の大手メーカーなどが本社の外国人雇用を増大する傾向にある。人間関係構築の第一歩となるスモールトークなどの流儀を身につけることは学生にとって、大きな意義があるのではないかと考える。

5. 授業実践方法

5-1. 授業の基本的アプローチ

授業では受講生の対話力向上につながる活動を行った。共通シラバスの到達目標の実現に欠かせない英語力（単語力並びに文法力）は、授業外活動（セルフスタディ活動）にて磨くことを課した。受講生の82%は英会話に苦手意識を持っていることを鑑み、スピーキング活動中のエラーコレクションは基本的に行わないことにした。受講生にとって発言しやすい環境を最大限演出するためである。尚、授業は英語で行い、コンテキスト等の難解な説明時にはあえて最低限の理解を促すために日本語のハンドアウトを作成した。

5-2. 英語力を高める活動

受講生には英語力そのものの向上につながる活動（“Self-Study Project”）を課し、その内容を日記形式で記載させた。これは授業外に行う課題であり、その内容如何によっては成績の10%に反映させるとした。活動内容としてはYNUの電子掲示板、“Jenzabar”に掲載した情報（推奨ウェブサイトや洋書情報、効率的なセルフトレーニング法に関するノウハウ）を参考にしてもらった。また、人生観や日本人の価値観に関する本（「名著講義」藤原正彦著など）を読むことも奨励した。

5-3. 対話力を高める活動

“Can-Do Checklist”を軸に活動を行った。ローコンテキスト文化出身者にも伝わりやすいコンテキストでのコミュニケーションを意識的に行う項目をまとめたものである。授業活動の主たるものは三分間即興対話（スモールトーク）、そしてスピーチ&ディスカッション活動である。スピーチ&ディスカッション用の“Can-Do Checklist”を以下に記載する。尚、下記の表の横軸の番号（3~11）は授業回数を表している。受講生は各活動後に該当欄に自己採点（◎、○、△、×）を行い、次の授業の指標とするものである。

	参考資料	求められる技術	3	4	5	6	7	8	9	10	11
13	「対話マニュアル」	英語の音楽を奏でる									
14	「対話マニュアル」	ロジカルに語れる（PREP）									

13	「対話マニュアル」	聞き手を意識する											
16	「対話マニュアル」	フォーマットを使用できる											
17	「対話マニュアル」	話し手に対し質問ができる											

6. 対話力を高める活動

6-1 心

安藤（1986, p. 274）は、ローコンテクスト文化とハイコンテクスト文化の違いを以下のように特徴づけている。

個の論理 vs. 集団の論理、

2元論的 vs. 全体観的思考様式

積極的 vs. 消極的な行動様式

自己主張の文化 vs. 自己滅却の文化

人間関係の非連続 vs. 連続

征服すべき自然 vs. 服従すべき自然

受講生が積極的に発言しない原因の一つとして心理的な要因が考えられる。人前で手を挙げるのが恥ずかしい。間違っことを言っていないか不安である。風波を立てるような行為は避けたい等であろうか。一方ローコンテクスト文化において、議論は対話相手と理解を深める手段との認識がある。ローコンテクスト文化における意義や背景指南を、安藤をはじめとする著書の理論に求め、配布資料を通して受講生に伝えた。

6-2. 技

聴講者から質問が出ない理由の一つは、発表者側にも原因がある。話している内容が伝わりにくいことが挙げられる。単語や文法に加え、発音（ストレス、そしてリズム）の誤り、目線などのボデ

イーランゲージの欠如、そして話の展開手法の稚拙さなどがその原因である。ローコンテキスト文化出身者と滞りなく対話をするためには、そのコンテキストに沿うことが求められる。受講生にはその意識も知識も欠けているのが現状である。よって授業では、ローコンテキスト文化のコンテキストに沿った話し方を身につける技術を高める活動を行った。

スモールトーク活動

受講生は、英語の文脈での何気ない会話を苦手としている。日本語の文脈をそのまま英語に置き換えてしまうので、尋問調（下記事例を参照）になる。これは、アメリカなどの一般的なスモールトークのコンテキストと合致しない。スモールトークとは人間関係構築を目的とした会話であるから、共感を大事にしながら話を進める。ペアになった受講生にはまず、課題で出た状況に沿った内容のダイアログを作成させる。その後配布物や教科書を参考に、ローコンテキスト文化出身者に伝わりやすい文脈でのダイアログを模索させた。下記に同じ受講生同士が授業の初回時、そして期末試験時に作成したあいさつからスモールトークダイアログをそのまま抜粋する。教室でたまたま隣同士になった初対面の学生同士という設定である。ダイアログには文法の誤りや、不自然な表現も見受けられるが、肝心なのは尋問調（日本語からの直訳調の対話表現）から共感を目的としたダイアログ（米国などのローコンテキスト型対話文）に変化して行く様が見受けられる点である。

授業初回時のある受講生ペアのオリジナルダイアログ

A: Hello,

B: Hello

A: My name is ×××. What`s your name?

B: My name is ×××. Nice to meet you.

A: How old are you?

B: I am 18 years old.

A: Me too.

B: Where are you from?

A: I m from Japan. Do you like Japan?

B: Yes, I do.

A: What`s your hobby?

B: I enjoy net surfing.

A: Oh, me too.

同受講生ペアの期末試験時のダイアログ

B: Excuse me, Have you been here before?

M: No, it`s my first time. I am a new student. Are you a new student?

B: Yes, I am. It`s a very nice day, isn`t it?

M: I agree with you. It`s very nice. What`s your major?

B: My major is economics.

M: Oh, me too! I`m Mary. Nice to meet you. And you`re . . . ?

B: Bob. My name is Bob. Nice to meet you too.

M: I think our teacher is being too late.

B: That`s true. I`m afraid our class won`t start. By the way, do you have any
information about this class?

M: I heard that students in this class . . .

”PREP”活動、及びそれに対する質問活動。

対話時に相手に伝わりやすい展開順序で話す（PREP 法）活動である。下記は PREP 法による話しの展開順序である。

Point : 主張、要点

In my opinion, S + V

Reason : 根拠

It`s because, . . .

Examples : 具体例、エピソード、数字、引用など。For example, . . .

Point : 主張の繰り返しで納得してもらおう。 That`s why . . .

2008年から行っている活動であるが、受講生が苦手とするのが「具体例」の部分である。根拠に対する具体例やエピソードを示すことを普段行っていないことが伺える。例えば“I love baseball”というスピーチを行う時、その根拠が「友情」だとする。「例えお金持ちだとしても、友人のいない人生は幸せといえるでしょうか？」等の問題定義を行った後に、その具体例として、めいめいに個人的な体験やエピソードを描写する。更に「例え話」や「引用」などを活用するとより一層、聞き手に伝わりやすいスピーチとなる。受講生はこの“PREP”の順序でスピーチを行い、質疑応答などの対話時にもできる限り意識して“PREP”の順序で発言することを推奨した。

ディスカッション活動

ペアや4名のグループでディスカッション活動を行った。この活動は期末試験を想定した「質問活動」の予行練習の意味合いも兼ね、ディスカッション時の話の展開の仕方を身に付けさせることを優先し、受講生に対するエラーコレクションは極力控えた。お題目を基に、上記“PREP”活動の後、聴講者は内容をまとめ、発表者に伝える（リキャップ活動）。その後、分かりにくかった部分においては質問をし、必要に応じてディスカッションに発展させるものである。また、その際にはディスカッション時に高頻度で使われる表現を定型化(全42表現)した表を机に置き、それを見ながら発表者と聴講者でやりとりを行った。下記がその、提携表現集（ワード集）である。

ワード集D「ディスカッション編」相手にフィードバックを与え、提案する！		
同意する		
<必須>		
1	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> That`s a very good point.	とても良い意見ですね。
2	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I think so too/That`s true/	
3	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I agree with you.	
<中、上級>		
4	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Yes, I feel that way also.	私もそう、感じています。
5	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I can agree with that.	それに同意します。
6	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Yes, that`s something we have in common.	それは我々共通の視点ですね、
同意しない		
<必須>		
7	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> That`s a good suggestion, but...	いい提案ですが...
8	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> (I`m sorry but) I don`t think so(because...)	Because...を使って同意しない理由を添えるのが普通
9	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> (I am sorry but)I disagree with you(because...)	
<中、上級>		
10	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I`m not sure about that.	それはどうなんですかね(否定的な見解を示す)
11	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I don`t know how it would work.	それで上手く行くんですかね。
12	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I don`t know about that. We`ll see.	いやー、難しいですね
意見を述べる		
<必須>		
13	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I guess.../Maybe it`s just me, but...	~の様な気がします/私だけかもしれませんが...(控えめ)
14	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I`d say.../I think ...	~だと思いますよ(一般的な表現)
15	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I strongly believe that ...	~と強く思います(私見を強く主張する)。
提案する		
<必須>		
16	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> How about +名詞	~なんてどうです？
<中、上級>		
17	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> What do you think about ~	控え目に提案
18	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> We need to ...	強く提案
相手の立場に対する理解を示す<中、上級>		
19	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I understand how you feel.	気持ち、分かります。
20	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I understand the situation you are in.	あなたの置かれている状況、分かります。
21	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Thank you, We appreciate that input.	その意見に感謝します。
相手に発言を即す<中、上級>		
22	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Do you have anything to add?	何か追加したいことがありますか？
23	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> What do you think (about this+相手の名前)	~さん、どう思いますか？
24	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> How do you feel about this?	これについてどう感じますか？
今は意見がないと言う<中、上級>		
25	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I`ll get back to you.	また改めます。
26	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I`d like time to think about it.	考える時間を下さい。
27	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I wasn`t aware of that.	それについては認識していませんでした。
説明を求めると多くの情報をもらう<中級、上級>		
28	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Can you tell me why you think so?	なぜそう思うのですか？
29	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Please tell me more.	もう少し、話してください。
30	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Could you be more specific?	もう少し、具体的に話して下さい。
意見を交換する<中、上級>		
31	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Do you have any ideas on this?	これについて、何か考えはありますか？
32	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> What`s your opinion on this?	これについてあなたの意見は？
33	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> In my opinion, A is correct. What do you think	A案が良いと思うのですが、どう思いますか？
相手の発言に割り込む<中、上級>		
34	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Excuse me, may I interrupt?	すみません。ちょっと宜しいですか？
35	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Let me add something.	ひとこと付け加えたいのですが。
使える表現<中、上級>		
36	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> Are you sure/certain(about this)?	(情報や真意などは)確かですか？
37	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> A little bird told me...	小耳にはさんだのですが...
38	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I`d like to discuss this with....	~と相談する必要があります。
39	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I really don`t know what to say right now.	今は何と言って良いのか...
40	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> This is between you and me.	ここだけの話なのですが...
41	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I need to excuse myself	ちょっと失礼します。
42	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> I`m afraid S+V	残念ながら ... (断るときの定型文)

6-3. 体

受講生の多くは、発言しようとする時に英語が出てこない。よって対話中に多々不自然な間が生まれてしまうのは、いたしかたないことである。“Well”, “What can I say・・・”等の「間を埋めるための定形表現」なども知識として持っているだけでは、使えるようにならない。日々のセルフトレーニングも、実践の機会があるからこそ効果を感じることができる。対話の「体力」を養うために、授業では受講生に可能な限り多くの対話の機会を与えた。試験日を除いた全13回の授業の間、計52回のスモールトーク、及び26回のディスカッション活動を行った。そしてここで重要だったのは、受講生の緊張感を持続させることであった。同じ相手とばかりではいつのまにか、「対話」が「会話」になってしまう。「対話」は相手のことを良く知らないからこそ成り立つ。よって一授業中少なくとも対話相手を4回、グループディスカッション（4名以上）は2回以上、メンバーを入れ替えながら期末試験に向けたトレーニングを行った。

7. 結果

7-1 期末試験内容

三つのカテゴリーで受講生の習熟度を精査した。スモールトーク劇、二分スピーチ、そして質疑応答である。ここではスピーチ、並びに質疑応答試験について言及する。発表者は三つのスピーチトピック（伝えたいこと、自分について、好きなこと）から事前に一つトピックを選び、聴講者を意識した発表（“Can-Do Checklist”記載の項目）を行う。持ち時間を3分とし、残り1分は質疑応答である。今期は「聴き手の姿勢」も評価査定に含めた。発表者に対して挙手をした質問や討論をする行為である。

7-2. 質問数

	火曜3時限目クラス	火曜4時限目クラス	木曜3時限目クラス	合計
学生数	24	22	26	72人
質問した学生数	11	11	17	39
質問した学生の割合	45.8%	50.0%	65.4%	54.2%
質問数	18	21	55	94

1 学生あたりの 質問数	1.6	1.9	3.2	2.4
-----------------	-----	-----	-----	-----

8. 結果に対する考察

発表者に対し全体の54%の生徒が、平均2回以上（2.4回）の質問をした。過去の授業では一クラス平均片手で足りる程度の質問者数であったことを考慮すると、増大したといえる。理解が容易な発表には、時間内にさばききれない人数の受講生が挙手をした。一方で、聴講者の質問が的を射ていたかといえば残念ながらそうとは言えない。下記は、“My favorite activity in free time” というトピックで、野球について語った発表者に対する聴講者からの質問である。

Who is your favorite player?

What is your favorite baseball team in Japan?

How often do you play baseball in a week?

討論とは、「ある事柄について意見を出し合って議論をたたかわせること」と辞書（デジタル大辞泉）にあるが、上記の質問に対し発表者が返答したところで対話が終わっていた。これは議論ではない。加えて、発表に直接関係のない質問も多々見られた。成績のために、とにかく手を挙げて質問をすることが優先されたと考えられる。聴講者の質問に対する返答を考えている内に持ち時間が終了してしまった発表者も少なくなかった。討論を行おうという意欲は見うけられたが、時間内にそれを行うための技術、そして体力がまだ十分ではないと言わざるを得ない。今後の課題であるが、まず受講生には必須表現の暗記を求める必要があるであろう。また、時間的な制約（一人につき1分）の中での活動においては討論よりも、ある程度定型化したフィードバックを与える活動にシフトする方が現実的であるかもしれない。そしてなにより、コミュニケーションにおけるディスカッション本来の意義や有益性を受講生に十分浸透させることができなかつた点を改善する必要がある。

9. まとめ

英語は日本人にとって文字と文法、音、そしてコミュニケーション流儀も異なる言語である。1Sの授業活動では「コミュニケーション流儀の違い」に焦点を当てた。異なるコンテキスト文化同士の人間が意思の疎通をはかる時には、コンテキスト間に存在する「ギャップ」を乗り越えなければならない。よって、対話時に分からないことがあれば自ら確認し、感想があれば相手に伝わるように表現したり、意見に相違があれば議論するような積極的な姿勢が求められる。そのためにはまず、

発言すべき時に発言する必要がある。それら意識的なコミュニケーション手法を「対話力」と呼んだ。今回の授業で受講生に求めたのは、発表に対して疑問に思ったこと、感じたことなどを言葉で伝えることである。発表者に対し聴講者が手を挙げコメントをする。それに返答をする形で自然発生的に議論が行われる様を期待した。残念ながら今回はそのための技術、及び体力不足が露呈した結果となった。現状の受講生の対話力を鑑みた時、短い期間に多くを求め過ぎた点は反省すべきである。最後に、受講生の対話に対する姿勢を指摘してまとめとしたい。授業活動中、他の受講生と積極的に対話を行う姿勢を見せない者が数名いた。授業を休んだ時や遅刻をした時、著者に何も働きかけをしない受講生も少なからずいた。受講生の一部は、キャンパスですれ違うときに目を合わせない。ロー・コンテクスト文化である米国のような国で上記のようなふるまいは、人間関係において消極的な姿勢と見なされても不思議ではない。スピーキングクラスにおいて、単語や言葉のルール、そして正しい発音等を身に付けるのと同様に、コミュニケーションの流儀を学ぶことは我々日本人にとって意義のあることだと考えている。そこに差異が存在することを客観的に認識することで、必要に応じて対処法が見いだせるからである。発言すべき時に、対話相手に伝わる様式で堂々と発言することもその一つなのではないであろうか？

参考文献

- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』
- 倉本由香利 (2012) 『グローバルエリート時代』
- 斉藤兆史 (2003) 「日本人に一番合った英語学習法」 祥伝社
- 寺内一、小池生夫、高田智子 (2012) 『企業が求める英語力調査』
- <http://www.toEIC.or.jp/info/img/003/summary.pdf>
- 立教大学経営学部 (2010) 『企業が求める英語力調査』 . 東京：興陽社
- Hall, E. 1976. *Beyond Culture*. New York: Doubleday
- 平田オリザ (2001) 『対話のレッスン小学館』
- 平田オリザ (2012) 『わかりあえないことから』 講談社現代新書
- 藤原正彦著 (2009) 『名著講義』 文芸春秋社